



6ヶ月間の派遣活動を終えて

— 足し算の支援

みなさんこんにちは。国際赤十字・赤新月社連盟（以下、IFRC）パプアニューギニア国事務所へ派遣されていた木本です。2026年3月20日で、半年間の現地での活動を終わりました。この半年間の活動の最終日、送別会でみなさんがあたたかく送り出してくれました。来た頃は、慣れない環境の中で、自分に何ができるのかを探るところからのスタートでした。初めての国際活動に、最初は戸惑うことも多く、日々の業務を理解するだけで精一杯な時期もありました。それでも少しずついろんな場面に関わる中で、自分なりにできることを増やしていけたように思います。



みんなでローカルフードを楽しみました！

変えるのではなく、足し算の支援を

そんな中で、IFRCパプアニューギニア国事務所五十嵐所長が話していた言葉がとても心に残っています。「支援は、現地のスタッフや地域の人たちの考え方ややり方を変えるのではなく、足し算をしていくこと。そして、相手が選べるように、選択肢を提示していくこと。」この言葉を聞いたとき、支援とはどういうことなのかが、自分の中ではっきりした気がしました。支援というと、何かを教えたり、正したり、よりよい形に変えたりすることのように見えがちですが、実際には、一方的に何かを押しつけても、現場では続きにくいと思います。これまで積み重なってきたやり方があり、関係性がある、その中で動いているものがあるからです。だから大事なのは、今あるものを否定するのではなく、そこに何かを足していくことなのだと思います。新しい見方の一つ足すこと。少しやりやすい方法を提案すること。「こういうやり方もある」と選択肢を示して、相手が自分たちで選べるようにすること。それが、本来の支援の形なのかなと感じました。実際、この半年で自分が関わったことの多くも、何かを大きく変えるというより、今ある業務に少しずつより良い方法やアイデアを足していく日々だったように思います。情報を見やすく整理すること。パソコンツールの使い方を共有すること。計画づくりを一緒に考えること。どれも小さなことですが、その小さな足し算が、現場の誰かの少しやりやすいにつながっていたらうれしいなと思います。

最後に

送別会でみなさんと過ごした時間は、とてもうれしい時間でした。声をかけてもらったこと、一緒に笑ったこと、そういうことがあったから、ここで安全に楽しく活動を行えたんだと思っています。今回の派遣は終わりますが、この半年で学んだことはこれからの経験にも必ず生きていくと感じています。日本国内に戻ってからも、この経験を業務や人材育成の中で少しでも活かしていけたらと思っています。これまで関わってくださったすべてのみなさん、またこのPOMだよりを読んでくださっていたみなさんに、心から感謝しています。本当にありがとうございました。



平和をもたらすマルク・グラスをプレゼントしていただきました



ケーキも用意していただきました